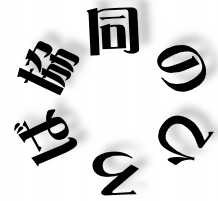


AARP パーケル会長来日



横田 安宏 (協同総合研究所常任理事)



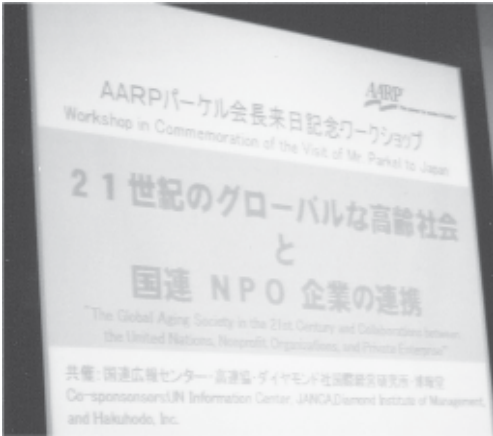
労協・高齢協との会食に臨むパーケル会長夫妻

高齢化問題を手がけ 3550 万人の会員を擁する世界最大のNGO、米国のAARPパーケル会長が、去る1月18日から22日にかけて来日、実質19～21日の3日間を質量共に精力的にこなし、関係者に強烈な印象を与えて帰国しました。パーケル会長はこの間国連広報センターでのワークショップ、日本記者クラブでの記者会見、厚生労働省を始めとする政府要人、同氏が永らく企業人として好関係を築いた日本の財界人、さらには、高連協や高齢協・労協など、高齢社会の諸問題に深く関与するNGO関係者との本音の意見交換や親密な交流に成功、今回の来日は、本人も大いに満足する成果をもたらしました。加えて今回のパーケル会長来日準備のため、国連・政府・NGO

(特に高連協・高齢協)・企業(特に事務局としての博報堂)など各セクターが果たした協力関係は、今後に向けて評価されるべき大きな収穫といえましょう。

< 来日の最大の目的は高齢協・労協グループとの交流 >

パーケル会長の最大の眼目は、端的に「高齢協・労協グループとの交流」にありました。同氏は2年前の2001年11月、高齢協(高齢者生協)の全国組織化、すなわち「日本高齢者生活協同組合連合会」設立総会出席のため、AARP次期会長として、当時のAARPカンジャ会長と共に当方の招待に応じる形で来日、高齢協・労協との交流を深めました。その折埼玉県の深谷地域福祉事業所「だんらん」や「とうふ工房」の見学、さらに設立総会交流会での「シルバーファッションショー」などに深い関心を示しました。1997年の労協視察団の成果として、わが国初の本格的AARP紹介を行った「AARPの挑戦」(シーアンドシ・出版)の刊行がAARPに高く評価されていたことが、ベースにあったからこそですが、「コミュニティをベースに新しい福祉社会を創造する」



という労協・高齢協の実践が高く評価されたからに他なりません。

今回は、韓国のKARP（韓国版AARPをめざす高齢者組織）の正式発足への出席要請から始まった来日でしたが、パーケル会長の思いには日本、それも労協・高齢協グループとの交流が主目的との認識が、明確にありました。事務局の立てた来日スケジュールが、会長の強い要望で変更されて19日初日の朝一番に、川崎中部事業所TACKでのパワーリハビリ見学が実現し、さらに20日夕方遅くには、上海の交流から帰国して間もない東京高齢協「いよよ華やぐ倶楽部」のファッションチームと2年ぶりの再会を果たしました。そして来日最後の公式日程は、21日夕方8時からの労協・高齢協グループとの夕食懇談でした。AARP側は会長のほか米国内でも著名な画家として名高いケイト夫人と国際部のニューバーン氏、こちら側は菅野労協理事長ほか5人の合計9人で、なごり尽きない「最後の晚餐」となりました。「今年10月AARPの年次総会は、数十カ国から2万人以上を集めて開催される予定ですが、労協・高齢協を始めとする日本の皆さんの参加を今から楽しみにしています。」との会

長発言が印象的でした。

< 高齢者セクターの協働：国連広報センターワークショップで >

東京表参道にある国連ハウスでのこのワークショップは、国連・NGO・企業各セクターが21世紀の地球規模のテーマである「高齢化問題」でいかなる協力がなし得るかを話し合う場となりました。国連広報センター野村所長がパーケル会長歓迎挨拶と共に、2002年4月にスペインのマドリードで行われた国連主催の第2回「高齢化に関する世界会議」の意義と成果を強調、21世紀のこの主要課題の重要性を再度指摘しました。

続いてパーケル会長は、AARP 作製ビデオをもとに理念と歴史、活動の現況を紹介するとともに、今やアメリカのベビーブーマー世代を取り込んで、年々巨大化しつつあるAARP（加入資格は50歳以上）3550万人の今も、1958年の創立の原点を忘れずに、「高齢者の尊厳」、「シニア世代の社会参加」、そして「国内外の各セクター間のパートナーシップ」を基本に、地道な活動を展開することこそがAARPの使命であることを強調しました。

次に発言を求められた筆者は、高連協国



国連広報センターワークショップでのパネリストたち（スピーカーは筆者）

際担当理事、高齢協理事の立場から発言、10数年にわたる高齢化問題の国際交流の体験をもとに、「高連協と国際協力」と題して、概ね次のような持論を展開しました。高連協は1999年の国連の国際高齢者年を成功させるため日本の39の高齢化団体が協力してできたネットワークで、本来的に国際協力を柱としている。高齢化問題が「先進諸国の出来事」から「地球全体のテーマ」となった今日、国連や、NGOのリーダーとしてのAARPの貢献と責任はきわめて大きい。日本の高齢化諸団体の多くは、日本のAARPをめざし、学び、提携を模索してきた。高連協はAARPに学びつつも、日本の土壤にふさわしい「日本型」を追求していく。日本は史上空前の少子高齢化のもとで、世界のフロントランナーとしての手本を示す責任がある。その意味で政治・行政・学会・教育・産業・NGOなどあらゆるセクターが、AARPを創始者とする米国型老年学を学び実践すべきである。



話し合うAARPと高連協首脳
(上右：パーケル会長、下左：堀田代表、下中：樋口代表)



<高齢者の尊厳を求めて国際的パートナーシップを：高連協とAARPの対話>

最終日のメインイベントともいえる高連協とAARPの2時間の対話は、トップ同士が本音をぶつけ合い分かり合えた点で、エキサイティングで実りある意見交換の場となりました。高連協は堀田力・樋口恵子両代表をはじめ加盟団体から数十人、それをAARPパーケル会長が正面から受け止めての本音トーク。AARPや高連協の概要説明は一切省略となりました。

パーケル会長は「人生は50歳から始まる。」との持論をベースにグローバルエイジング、高齢化に関する世界会議、AARP・高連協のパートナーシップの必要性を強調しました。これに対し堀田代表、NALCの高畑敬一会長、吉田専務理事、ジャーナリストの残間里江子氏、樋口代表などがいろいろな角度から、質問と持論を展開しました。政治・社会・経済の仕組みや発展段階が異なる世界の国々の中で、高齢者の尊厳と自立をAARPはどう捕らえてグローバルエイジングを展開していくのか、雇用における年齢差別禁止法制定の原動力となったAARPは、世界の年齢差別問題をどう考えているのか、AARPの組織と予算の巨大化、それを支える活動は時にNGOの枠を超えて営利企業の印象を与えるが、理念と現実のギャップはないのか、AARPの国際戦略はパートナーシップの強化かそれとも支部の創設か、今年の米国大統領選で、AARPとして特定の候補を推薦するのか、AARPの政治圧力団体としてのあり様が云々されるなかで、政治との関係を会長としてどう捉えているのか、組織における女性のイニシアティブに



ついでの見解は、などなど、AARPの組織と戦略の本質に関わるものばかりで、それをみごとにさばくパーケル会長の頭脳の回転と討論技術は、集会解散後の参会者に、ひとしきり感動と驚嘆の輪をもたらしました。

その討論のやり取りはとても紹介し切れませんが、パーケル会長の見解を圧縮して紹介します。

AARPは高齢者の尊厳と人権を守ることを目的とするNGOであり、政治団体でも、営利企業でもない。有権者である会員に政治に関する情報や候補者に対し討論の場を提供することはあっても、特定の候補を推薦したり、政治資金を特定の政党や候補者に出すことはせず、政治的中立を保っている。事実AARP会員の40%は民主党支持、同じく40%は共和党支持、残りは無党派である。また、保険や薬品など多くの物品やサービスを会員に提供するが、これはAARP設立の目的とも深く関わる事業である。それが組織の財政を支えていることは確かだが、しかし営利を上げるのが目的ではない。女性であるが故の、あるいは高齢者であるというだけの理由で差別をすることは許されないし、AARPは過去それらのために戦ってきた。しかし目的は「尊厳」に基礎を置いた高齢社会を構築することにあ

り、決して高齢者が有利で若い世代が不利になるようなことを求めるものではない。そのような意味も含めて、AARPは昨今、かつての全米退職者協会という呼称をAARPと改称した。

世界の高齢化は、先進国を超えて発展途上国にも大きく広がりを見せる「地球規模」の課題となった。グローバルエイジングの課題を遂行し克服するためには、自国の制度や経験を押し付けるのではなく、それぞれの歴史や文化、政治・経済・社会の仕組みを超えて、情報を交換し、学びあうことがきわめて重要と考えている。その意味で、高連協及びその加盟団体を始めとする日本の高齢化諸団体とのパートナーシップを大切にしていきたい。10月のAARP年次総会へ、日本の皆さんが多数出席され、さらに意義ある交流が実践できることを切に期待している。